

平成三十年七月二十七日發行
通卷一三七号(新刊)第三十三卷

京鹿子



7月号

夏季吟旅特集号

— 近 詠 —

鈴 鹿 呂 仁
拾掬集 その三十四



新 緑 へ 己 が 熾 火 の 鎮 も れ り
新 緑 の 呼 吸 に 合 は せ る 二 人 可 可
ふ る さ と の 空 ま で 一 里 桐 の 花
桐 の 花 予 讚 の 空 を 引 合 は す
泣 き み そ と 苦 虫 の 父 武 具 飾 る

(美山・大野ダム四句)

あぢさゐや待ち合ひ茶屋の鳥二羽
山藤の胡乱を糺す峽ぐらし
水音の包む師の句碑青葉風
水ごころ持てぬ現し身花は葉に
消印をたどる付け文遠郭公
梅雨蝶の往くあてのなき始発駅
椰子の実や夜の新樹のアルファ波
蜘蛛はしる起死回生のポテンヒット
空蟬の残せし微熱地に還す

— 近 詠 —

30 年度 吟旅作品

砂^さ嘴^しの松

鈴鹿 仁



侠客を恋へば卯波の沖鳴りす

(三保の松原)

夏あらし吹き残したる三保伝記

()

風青し広重恋ひて砂嘴の松

()

気賀関や自在に通る蟻の列

(気賀関所)

井の国のその名を残し庭若葉

(龍潭寺)

—
近 詠
—

和田 照海

巫女遅日

神島の木洩日を掃く巫女遅日

虎杖の音少年の山河かな

甘噛みのポストの口や亀鳴けり

薫風の真青すくらんぶるえつぐ

水切りの石の溺るるひろしま忌



松本 鷹根

花 椎

松の芯挙り法堂閉ざすまま

藤影の浮世流しの風に坐す

雨乱す句碑の躑躅に師を慕ふ

句碑五月水を称へて雲浮かす

花椎の黄金飾りの美山霽れ



近 詠

塩貝 朱千

海いろの文

藤の香やむづ痒き背に翅の欲し

藤染めのひそかな色に片思ひ

更衣海いろの文届きし日

鳳凰のやうな雪溶け八十八夜

薔薇大輪雨に崩るる音かすか

英華採集

落花枝に戻らざる世の渦まきて

高根安田優歌

桜の散り様は、鮮やかに美しく見事である、と多くの人に異口同音に語られるが、掲句の「落花枝に戻らざる」の措辞は、人は決して過去に戻ることが出来ない比喻として使われており、明日を見て前に進むしか選択肢がない状況を暗示している。「世の渦」は混沌としたこの世の暗澹とした闇を指しているに違いない。中村彰彦著に「落花は枝に還らずとも」があり、幕末の動乱に生きた会津藩士・秋月悌次郎の半生に重ねて読んでみるのも一興である。

桜さくら衣掛の道御室まで

大津村野名於子

京都の衣笠山は、宇多法皇が盛夏に雪景色を見たいが為にこの山一面に白衣を敷き詰めた伝説から衣掛山の異名を持つ。この故事を下敷きに桜で有名な御室を引き合いに出し、辺り一面の満開の桜を愛でている。今では金閣寺・竜安寺・仁和寺は世界遺産を巡るルートになっている衣掛の道。「桜さくら」の季語のリフレインが効果を挙げていると言える。

山里に屏風走りの春しぐれ

月ヶ瀬松本すま

いつも見慣れている筈の山里の一風景が、漸く山里にも春が感じられるような春のしぐれによって様相が一変したのであろう。作者の驚嘆の思いが「屏風走り」の造語に込められている。しぐれがさつと降った様は、一刷毛で塗られた一幅の絵のようにも感じられる。表現の一つの工夫が、秀句へと生まれ変わった一例である。

神麓集

麥の秋 藤岡紫水

晩鐘の余韻五月の湖に果つ
重ね来し一門の榮武者人形
雨のまま昏るる明るさ麥の秋
一條の光を糸に囚鮎
白牡丹水のやうなる夜を呼べり

百日紅 沼田巴字

地藏堂一つあるのみ大夕焼
書に興じをれば鳴りけり貝風鈴
百日紅咲き老人の死出の旅
百日紅棚引くさまを浄土とす
老年のかなはぬ夢や雲の峰

蛇 苺 丸井巴水

紫陽花の浮気心を論す雨
居るだけで善しと言はるる春日向
軟着のドローンの傍に蛇苺
白馬にて来るはず五月婿養子
杜若だらり二枚の舌を見せ

花は葉に 植村蘇星

梅が香や一目千本史を語る
梅が香や直線曲線八合目
これやこの臍なる天守風光る
風光る出城山城点と線
八十路坂労り和して花は葉に

神麓集

水の小踊り

北川孝子

堰越ゆる水の小踊りみどりの日
ランドセルに馴染み緑の列ちぢむ
靴の紐解きてやすらぐ若みどり
望郷の草の匂ひや初諸子
老いて行く静けさにあり桐の花

花

直江裕子

陽炎は失なつたはずの旋律
花の門きれいなお辞儀して去りぬ
漂ふは思ひなかばで散る桜
花の木に開かれてゐる飼育箱
本当を悟られぬやう桜餅

木の芽和

高木晶子

手つなぎの離れ易さよ青き踏む
父母の隣に座り木の芽和
おかつばの見えかくれする花吹雪
結界を取りはらひたり花吹雪
須弥壇の奥のくらがり白椿

婆娑羅

伊藤希眸

花の夜や婆娑羅ばさらと齡重さね
白魚の跳ねて存在世に問へり
春蚊一匹句稿を乱し真夜乱し
花みずき異国めき街北を指し
水銀(みずがね)のなめくぢの跡土鉢古る

神麓集

出町柳 奥田筆子

出町柳行きは静脈初つばめ
カメラクルー蚊柱のごと移動して
形代の袖の重くて流れけり
チューリップ午後から脚が太くなる
花了る働くといふサプリメント

シャドーボクシング 井上菜摘子

スイートピーのむらさき君が見えにくい
鳥かへる生涯に鍵もたざりし
鳥引くや少年シャドーボクシング
返信メールペンペン草は刈つてあり
本題まで摘草したりランチしたり

昼月 村田あを衣

たんぽぽの黄の真ん中にある記憶
落し角罪あるごとく背走す
蝌蚪の尾の取れたり我になき決断
完璧のもろき裏がは海市立つ
昼月を置きさりにして海市消ゆ



鈴鹿呂仁

静岡（三保松原・日本平久能山・龍潭寺・気賀関所）

万本の松のうねりや三保薄暑
伊豆はるか海霧を深めて湾いびつ
羽衣の浜の愁ひや梅雨奔る
芙蓉峰薄暑のバスの窓に立つ
万緑のうねりや久能山緩ぶ

下 闇 の 葵 の 驕 り 四 百 年
青 葉 寒 き ざ は し 高 き 東 照 宮
溪 谷 の 深 き 眠 り や 青 葉 木 菟
井 伊 を 守 る 揚 羽 二 頭 の 睦 み 合 ふ
一 石 も ひ と つ の 仏 緋 鯉 揺 る
蜥 蜴 這 ふ 禪 問 答 の 仏 貌
ひ と す ぢ の 糸 に 絡 め ず 蜘蛛 の 空
葉 桜 の い ち ま い 気 賀 の 関 所 札
子 燕 の 平 番 務 め 気 賀 関 所



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

綿菓子に巻き取られゆく春霞

京田辺 山中志津子

猫柳のあたりで一人神隠し

ミモザ咲く光と闇を潜り来て

折れさうな心支へて白すみれ

角落ちて神意届かぬ鹿の群

二番手を引き受けてゐる黄水仙 京 井尻 妙子

河馬を見るためのベンチで見るさくら

花の昼孔雀ゆつくり向き替へる

決めポーズ考へてゐる恋の猫

あとひとり待つ春虹の立つ裾野

春光や風のてのひらやはらかい

城陽 鷺山 珀眉

フラミンゴの求愛ダンス花の昼

しやぼん玉あふれ風音歪つなり

飛火野やまだ濡れてゐる落し角

太白のひかりあまねく海道忌

おくれ翔つ鳩の目やさし若みどり 京 片山 熙子

白椿雌しべがつんと無鄰菴

ゆるやかに花の風着て若き女

コピ―機が発熱してゐる新学期

抜け道にぬけ径のあり花はこべ

耕して土の饒舌はじまれり

福 山 亀井 福恵

仙人の寝姿の鳥霞立つ

早蕨やまだ働けるたなごころ

由良の門の風に鈴振る花馬酔木

うららかや寺に文殊と力石

落し角漢の背負ふ重きもの

百歳へ漕ぎ出す船や花洛の忌

夜桜やすれ交ふ人がふと鬼女に

曼陀羅の奥へおくへと花見かな

山の蟻未知の世界へ飛び出せり

福 知 山 西村 滋子



落花枝に戻らざる世の渦まきて

ゆらゆらと船が空航く花霞

カステラの薄紙の黙夕ざくら

米寿なる鼓の韻や花の雲

桜さくら衣掛の道御室まで

淀渡る風の誘ひや初桜

高 槻 安田 優歌

大 津 村野名於子

花吹雪く橋の向かうは大阪城

伊吹嶺の空澄み渡る鳥雲に

山里に屏風走りの春しぐれ

開け放つ本堂ぬける梅の風

天空に梅を見下ろす堂庇

丸顔のお掃除地藏梅の寺

初燕あの日そのままのポートレート

春の池亀の瞑想何思ふ

風光る神の恵みは掌に

巢立鳥帽子投げれば空青し

消えし雪寒きアメリカ又白し

今日の庭雪はまばらになりにつけり

晴天や昨日につづく春うらら

風もなく小雪チラチラ静かな夜

何げなく窓を開くや春の雲

いつもとは異なる明の春障子

麗日や小川の音に立止り

望む事叶へられるか露の臺

彼岸入り身をつゝむもの多過ぎて

春暖や隣家の男児の暖かく

三月の雪は孫らの形見とか

寒戻り仔ねこ数匹素通りす

月 ヶ 瀬 松本 すま

ア リ ソ ナ 伊吹 之博

オ ハイ オ 水谷 直子

酒 田 藤波 松山

洪 川 東 秋茄子